

共同研究 ● 〈アサイラム空間〉の人類学：社会的包摂をめぐる開発と福祉パラダイムを再考する（2009-2011）

全制的施設〈アサイラム〉

近年、障害者・ホームレス・移民・難民・先住民といった人びとの社会的包摂にむけた支援の強化が、結果として新たな形の排除を生み出す可能性があることが指摘されている。

これまで国家は、生産性を欠くあるいは正しく消費できない「逸脱者」と位置づけられた人びとを「全制的施設」(ゴッフマン 1984)に隔離し、教育・訓練・治療などの「対処」をおこなうことで社会的に包摂しようとしてきた。社会学者E. ゴッフマンによれば、全制的施設とは「多数の類似の境遇にある個人が、一緒に、相当期間にわたって包括社会から遮断されて、閉鎖的で形式的に管理された日常生活を送る居住と仕事の場所であり、そこでは監督される側と監督する側の間に根本的裂け目がある」(ゴッフマン 1984:v)という。それゆえ全制的施設とは、被収容者のアイデンティティの剥奪や従順性のテストを通して、「自己決定」や「自律」といった近代市民社会が構築した主体の自由を否定することが許される空間といえる。全制的施設の多くは、近代国家が被収容者を庇護したり、逆に被収容者から他の国民を庇護するために構築されたものであり、たとえば前者には身体障害者福祉施設や孤児院などがあり、後者には精神病院や刑務所などがある(ゴッフマン 1984)。それは、個別の身体の違い・拘束・分類・監視・規律・訓練を通じて、自律的な主体形成を促すような統治のあり方を彷彿とさせる。このような被収容者の物理的な自由をつよく制限するような全制的施設のあり方は1960年代以降、精神保健福祉などの分野を中心に痛烈な批判を受けることとなる。



2005年、大阪市鞆公園における強制排除。小屋のまわりでスクラムを組んで抵抗している野宿者と支援者。それを取り囲む市職員(山北輝裕撮影)。

グローバリゼーションと全制的施設の透明化

グローバリゼーションは移民・難民あるいは「新しい貧者」と呼ばれる労働市場から疎外された人びとなどの新たな「社会的弱者」を生み出すと同時に、これまで社会的包摂の主体として考えられてきた国家のあり方にも変更を迫っている。こうした状況のもとで、難民支援・開発・福祉に関わるさまざまな現場からは、これまで「一時的」なものとして想定されていた全制的施設への滞在が長期化し、人びとがそこから包括社会に帰還することが困難になる状況が報告されている。

社会学者Z. バウマンは、このようなグローバリゼーションが生み出した社会的弱者に対する対処の場を類型化している(バウマン 2007)。「ビッグブラザー」とは、G. オーウェルが監視社会や全体主義への警鐘をこめて空想したディストピアの支配者に由来している。ビッグブラザーⅠ型とは、ゲットーや難民キャンプや刑務所のような、「そこにあるべき者」を隔離・庇護する施設である。これは、ゴッフマンの言う全制的施

設に重なる。ところが近年、ビッグブラザーⅡ型と形容しうる、新たなタイプの処理場が増加しつつあるという。それは、Ⅰ型とは逆に「今いる場所に『適さない』人々を見つけ出し、その場所から追放し、『出身地』か『あるべき場所』に強制送還し、あわよくば最初の場所に近いいかなる所にも彼らが戻ってくることを許さない」隔離の技法である。具体的には望まない人物の侵入や接触を阻止することを目的とした、近年の欧米社会における出入国管理体制の強化や住区全体を外壁で囲みゲートを設置する「ゲーテッド・コミュニティ」(ブレイクリー・スナイダー 2004)化などがあげられる。

このように統治の技法や情報テクノロジーの進展とともに、権力による介入の透明化が進んでいる。それは18世紀以降に登場した開放・包摂・放任・予測・統計的評価・調整を通じた包括的なセキュリティの実現を目指す生権力が社会全体を覆い尽くす状態(ドゥルーズ 2007)と見ることもできる。このような、いわば不可視の全制的施設が遍在する状況においては、ある意味では私たちすべてが「被収容者」としての生を営んでおり、もはや「退所」する場所など無いのかも知れない。

全制的施設におけるインフォーマルな実践

遍在する不可視の全制的施設における生の形式を捉えるためには、それを所与のものとして見なすことをせず、それらを構成する諸要素を注意深く検討する必要がある。

ゴッフマンは全制的施設を構成する領域性や制度性を強調した。同時に「職員」と「被収容者」による相互行為の形式を類型化し、それらが全制的施設の組織構造を維持したり、逆に改変する可能性をもっている点を指摘している。まず「第一次的調整」とは、全制的施設の「職員」と「被収容者」が施設を構成するフォーマルな規則・制度に服従することである。それに対して「第二次的調整」とは、「特定の組織内の個人が非公認の手段を用いるか、あるいは非公認の目的を達するか、あるいは双方を同時にするかして、彼の為すべきこと、得るべきもの、かくして彼の本来の存在様態とされているものなどをめぐる組織の非明示的仮定を回避すること」(ゴッフマン 1984:200-201)である。共同研究者の山北輝裕によれば「アサイラムは施設/制度のみによって完結するのではない。それを構成するアクターによる諸実践を通じてようやく達成されるという、残余をもちあわせている」(山北 2011)のである。さらにゴッフマンは、このようなインフォーマルな実践の一部が「最後には公式に承認される」(ゴッフマン 1984:206-207)ことがある点を指摘している。

さて、近年の難民支援・開発・福祉などの分野でNGOやボ



ケニア・ダダブ難民キャンプの食糧配給センター前にぎわう配給食料買い取り店。難民は配給食を売却することで、伝統的な食文化の維持に必要な食材購入費を捻出する(内藤直樹撮影)。

ランディアなど、市民が国家の役割を代行することにある種の可能性が見出されている。それは私たち市民が社会的弱者の包摂/排除に関わる不可視の全制的施設の「職員」となることを意味している。すなわち私たちは権力の網の目から逃れえない「被収容者」であると同時に「職員」として、どのように生きることが可能なのだろうか。本研究会では、その可能性をゴッフマンの第二次的調整すなわち「職員」と「被収容者」によるインフォーマルな実践に求めている。それはともすればサバルタンである「被収容者」だけに注目しがちな人類学の旧弊を廃し、同じ場を構成する「職員」の実践にも注目することで、現代の全制的施設への「一時的」滞在を強いられ続けている人びとが、自分たちが生きる場を創りあげるためにおこなっている諸実践について検討することである。

「自由」概念の再検討に向けて

Chatterjee(2004)は、インドの難民・不可触民・スクウォッターなど、市民社会からはずれた人びとによる国家の資源への権利主張の運動を「被統治者の政治」と呼んだ。市民社会の法・規則に従えば存在や権利が認められない人びとは、時には非合法の手段をも用いることで、存在をかけた政治活動を展開している。Chatterjeeは、そのような正統なプレイヤー以外の人びともを含んだ多元的な「参加者」による競争・葛藤・交渉による民主主義の再編の可能性を示唆している。

政治学者の齋藤純一は自由を「人びとが、正当にアクセスしうる自己/他者/社会の資源を用いて、達成・享受するに値すると反省的評価にもとづいて自ら判断する事柄を、他者の作為/不作為によって阻まれることなく達成・享受できる」と定義する。しかしながらそれは、難民や不可触民といった存在や権利が認められない人びとによる時には非合法の運動や、全制的施設における第二次的調整の末に獲得するインフォーマルな実践を承認することはできない。なぜならそうした人びとは「正当にはアクセスできない資源」を用いてさまざまなきかけをおこなうことで、生きる場を構築しているからである。

ネオリベラリズムの思想と実践が世界を席捲して以降、古典的な自由概念を相対化し、新たな自由像を構想することが、人文・社会科学系分野にける大きな課題になっている。これまで人類学は、そうした西欧起源の概念を、それとは異なる思想や実践を通じて相対化することを学問的な存在意義のひ

とつとしてきた。その一例として人類学は、近代のリベラリズムにおける自由観が自明視してきた慣習や構造的制約から解放された状態において自らの意思決定をおこなう主体像とは異なる、むしろそうした制約のなかで「自己」実現をおこなおうとする多様な主体のあり方を示してきたことが指摘できる。しかしながら「自己」と「他者」の自由の相克をめぐる古くて新しい問題を止揚し、〈自由〉概念を再検討しようとする超領域的な議論に対しては、沈黙を守っているようにも見える。私たちは人類学的な知見や方法論を使って、いかに自由をめぐる問題に接近できるのだろうか。本研究会においては、個別具体的な場において、諸アクターがそれまでの経緯や場の構成、相手の立ち位置を理解しながら、対話・交渉・競争・葛藤・せめぎ合いをおこなうなかで、ある種の合意を形成するダイナミクスに注目し、そこにオルタナティブな〈自由〉の可能性をみたいと考えている。全制的施設という自由の影絵、つまり自由を奪うことを可能にする近代のしくみについて探求することから出発した研究会は、今後は自由の相対化に向けた人類学的実践に歩を進めることになる。

【参考文献】

- パウマン、Z. 2007『廃棄された生—モダニティとその追放者』中島道男訳 昭和堂。
 ブレークリー、E.・M. スナイダー 2004『ゲートド・コミュニティ—米国の要塞都市』竹井隆人訳 集文社。
 Chatterjee, P. 2004. *The Politics of the Governed: Reflections on Popular Politics in Most of the World*. Columbia: Columbia University Press.
 ドゥルーズ、G. 2007『記号と事件—1972-1990年の対話』宮林寛訳 河出書房新社。
 ゴッフマン、E. 1984『アサイラム—施設被収容者の日常世界』石黒毅訳 誠信書房。
 齋藤純一 2005『思考のフロンティア 自由』岩波書店。
 山北輝裕 2011『アサイラム空間と都市下層』日本文化人類学会第45回研究大会分科会(於法政大学)『〈アサイラム/アジール空間〉の人類学: グローバリゼーション、国家、社会的排除/包摂(代表:内藤直樹)』ワーキングペーパー。

ないとう なおき

研究戦略センター機関研究員。専門は生態人類学、アフリカ地域研究、難民研究。東アフリカ牧畜社会の制度・組織の可変性・流動性、貧困と開発、紛争問題、難民問題などに関心がある。論文に「東アフリカ牧畜社会における政治的民主化と民族間関係の動態: 北ケニア牧畜民アリアルが経験した地方分権化と国会議員選挙の事例から」(『国立民族学博物館研究報告』34(4) 2010年)など。